

まきむく

纏向
考古学通信

Vol.16

2022.08



箸墓古墳の東を通る「上街道」の跡

特集 |

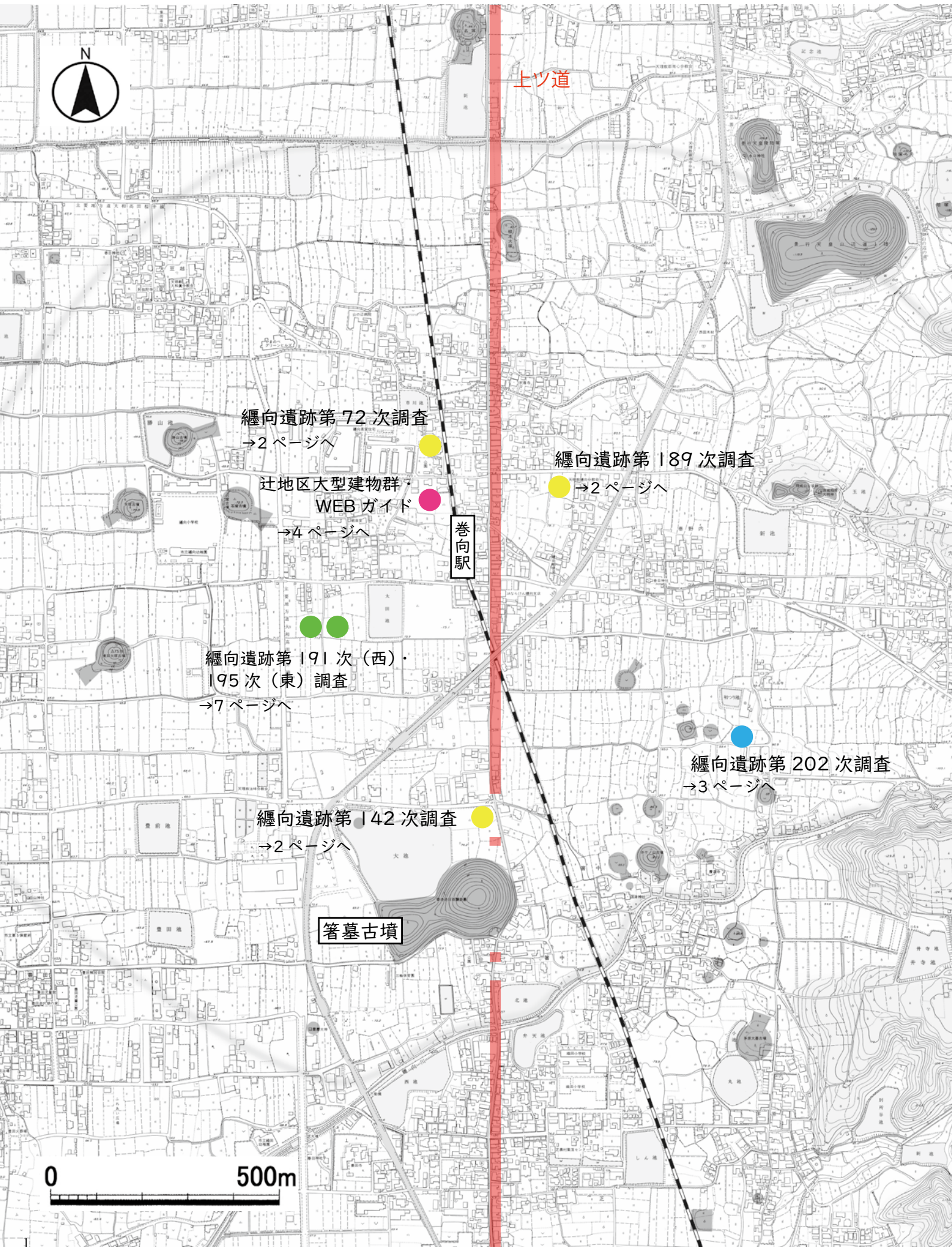
纏向のなかの上ツ道

纏向幻想－卑弥呼に会いに行く(3)－

発掘された纏向遺跡R3

令和3年度まきむくレポート

まきむく裏物語：予測困難?! 纏向の発掘調査



道の上のなかの纏

1350年前一日本古代史上、最大の内乱といえる「壬申の乱」が勃発した。大海人皇子（のちの天武天皇）が天智天皇の子・大友皇子を破り、即位するに至った乱の戦場の一つとして箸墓古墳周辺が日本書紀に登場する。

「箸陵のもと」に戦ったと記される「上ツ道」は現在「上街道」として知られる道の原点といわれる。

そんな上ツ道の数少ない調査をご紹介します。



▲北東から撮影した箸墓古墳と現在の「上街道」（左端の道）

上ツ道にかかわる 発掘調査



▲「宮内」墨書土器

第72次調査では、8世紀前半に埋没した流路と、8世紀後半の剝貫井戸枿材が確認されている。

流路からは漆塗りの須恵器鉢などとともに、墨書土器がみつかった。なかでも、外側に「宮内」と書かれた土器に着目すると、類例が平城宮跡で多く発見されており、皇室の庶務などを担った宮内省にかかわる可能性がある。

また第189次調査では、緑釉陶器や奈良三彩片、漆塗りの須恵器などがみつかった。

これらの遺物は、上ツ道と推定されている近くで発見されていることから、主要道路の近くに置かれた役所の存在が推定できる。

第142次調査では、調査地の東側を南北に走る上街道に沿う位置で、古墳時代後期以降の盛土状遺構が確認された。盛土のなかから出土した土器片のうち、最も新しいと考えられるものは6世紀後半～7世紀初頭ごろの須恵器杯で、この盛土は飛鳥時代に築かれた可能性が高いとされた。このような出土遺物の時期と、上ツ道を踏襲したとされる上街道に沿う位置にあるため、盛土状遺構は上ツ道の整地土と考えることができる。

また周辺は奈良時代の遺構や遺物は少ないが、この盛土を覆う奈良時代の洪水層からは2点の和同開珎がみつかった。流通量が少なかったとされる貨幣の出土も、盛土状遺構が上ツ道に関連していることを補強する材料となるかもしれない。



▲第142次調査 盛土状遺構

発掘された纏向遺跡 R3

纏向遺跡第202次調査

期間：2021年11月10日～11月25日

面積：約35.5㎡

今回の調査地は纏向遺跡の東部、ホケノ山古墳から北東に約280mの地点で、近隣には小川塚西古墳、小川塚東古墳、平塚古墳など古墳が点在し、塚原、ツカアイといった「塚」の入った地名も認められる地域です。

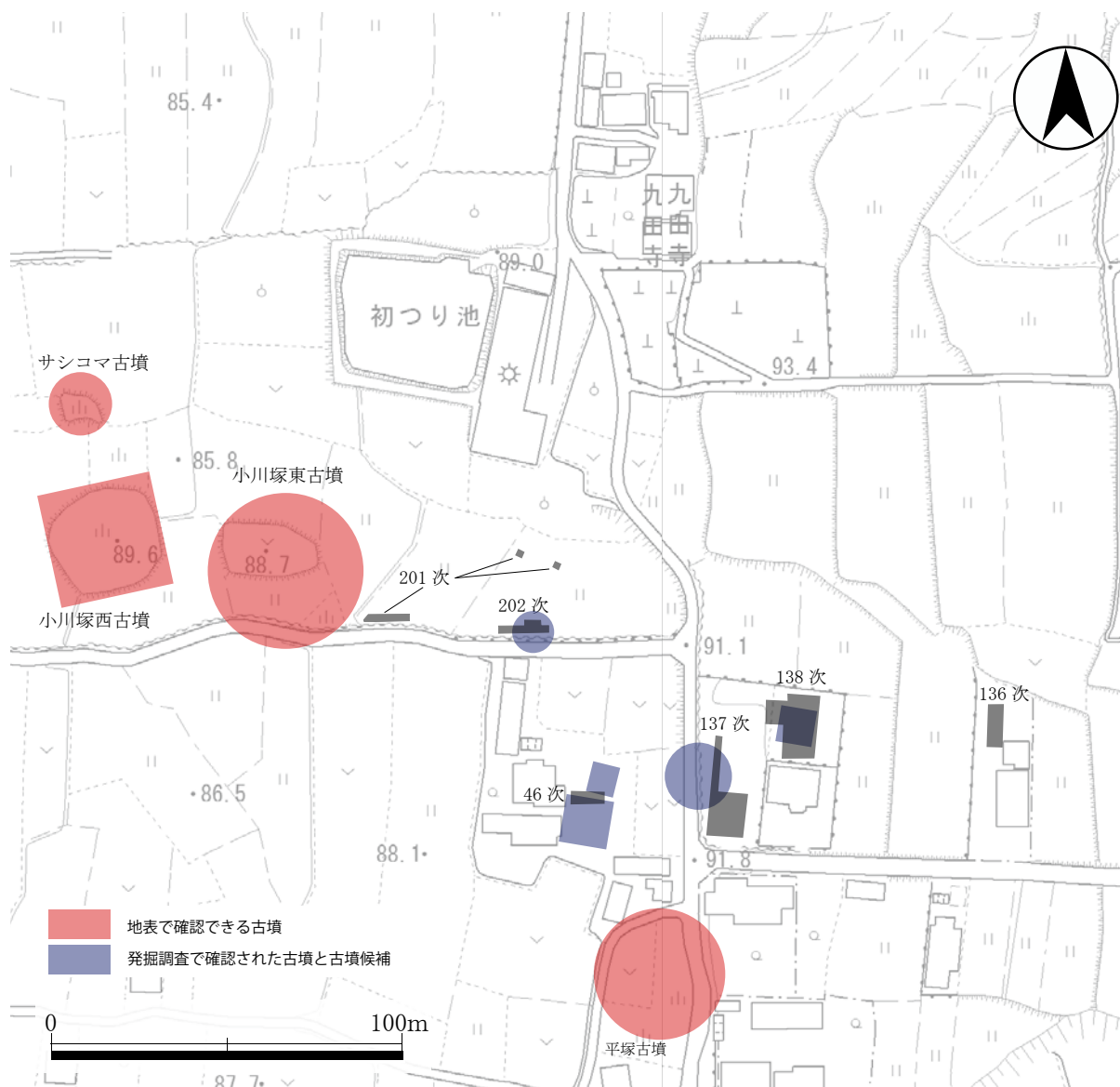
調査の結果、幅約3.2mの南北溝が見つかりました。溝の出土遺物には6世紀頃の埴輪片があることから、南北溝は古墳の濠の可能性があると考えられます。隣接地に古墳は見当たらないのですが、これまでの近隣の発掘調査でも既に墳丘が壊され、濠の跡だけが地中に残っていた古墳が複数見つかったことから、今回も同様の濠を見つけているのかもしれない。

こうした調査成果は、現在纏向遺跡の古墳は地上に見えるものがすべてではなく、地中には未発見の古墳がより多く眠っていることを暗示しています。今後の調査の進展により、纏向遺跡のどこにどういった古墳が築かれたのかより具体的な姿がわかるものと考えられます。

(森暢郎)



▲調査区全景（北東から）



▲纏向遺跡第202次調査とこれまでの調査位置図 (S=1/2000)

令和3年度まきむくレポート

2021年4月－2022年3月の主な活動をピックアップ！



▲芝村陣屋跡の石垣

東京フォーラム番外編

「纏向遺跡を語る～発掘50周年を迎えて～」



例年東京都にて開催してきました「東京フォーラム」は昨年度、纏向遺跡発掘50周年の節目に調査を振り返る座談会の様子をお申込み者限定で動画配信しました。(2022年2月17日から3月23日まで)

数々の調査・研究に関わってきた出演者に調査成果の意義や纏向遺跡への思いを熱く語っていただいた貴重な映像となりました。

纏向考古楽講座

2021年10月30日、昨年度に続いて新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、遺跡等をめぐる形で纏向考古楽講座を開催、8名の参加者と当センター前から出発し、芝遺跡、芝村陣屋跡、稲荷山古墳、慶田寺など、芝地域を歩きました。

第15回纏向学セミナー

2022年1月22日に第15回纏向学セミナー「女王制を語る－「卑弥呼」は何代続いたのか－」と題して、前田晴人先生のご講演後、当センターの寺沢薫所長と対談いただきました。

倭国の王として擁立された「卑弥呼」の実情と、日本古代史における女王制・男王制の仕組みに迫る前田先生のご講演に参加者も深く聴き入っておられました。

また対談では、『魏志』倭人伝にも様々な解釈があるように、3世紀から5世紀にかかる時代の解釈や日本列島の勢力等について、文献史学が専門の前田先生と考古学が専門の寺沢所長という異なる目線での論議が展開されました。



辻地区建物群が現代によみがえる―史跡纏向遺跡WEBガイドがスタート！

大型建物群が発見された辻地区に設置したQRコード（3ヶ所）をお手持ちのモバイル端末で読み込むと、復元3DCGや各種解説がお楽しみいただけるようになりました。

初めて纏向遺跡に触れる方はもちろん、もっと詳しく知りたいという方にもオススメです。英語版もご覧になれます。今後もコンテンツの拡充を予定していますので、どうぞご期待ください。



◀▼設置されたポールのQRコードを読み込むと、詳しい解説や大型建物群が現地の風景に浮かびあがります。



纏向幻想

－ 卑弥呼に会いに行く(3)－

所長 寺沢 薫

今回は、最後の「イト」倭国王にも選ばれたイト国女王の首長霊継承の秘儀のようすを覗き見し、2世紀末の「イト」倭国をめぐる不穏な政治情勢を予見してみた。私のタイムマシンはまだ未完成で心許ないけれど、今回は時間のダイヤルを精一杯調整してその実情を報告しよう。

『魏志倭人伝』に記された「倭国乱」は、のちの史書をして大きな戦乱をイメージさせた。5世紀前半に『後漢書』を撰した宋の范曄は「倭国大乱」と表現したし、7世紀前半に『隋書』を編んだ顔師古も「其国大乱」と書いた。

この評価は現在へと尾を引いている。「相攻伐歴年（相攻伐すること歴年）」という表現から、中世戦国時代のように倭国では何年ものあいだ激しい戦乱が繰り返されたと考える人たちは多い。

しかし、防御のための集落・遺構や武器・防具は見つかったとしても、広域、長期にわたる激しい戦闘を裏付ける資料はない。かつて北部九州で見られたような多数の戦死者のすがたも見えてこないのだ。

『後漢書』、『隋書』、『北史』は「歴代無主」と言葉

を挿し入れる。『魏志倭人伝』の「倭国乱」の直前の「其国本亦男子为王。往七八十年（其の国もとまた男子を王と為す。とどまるところ七、八〇年）」という記事が大きな意味をもってくる。倭国（私のいう「イト倭国」のこと）の王は事実上イト国男王の系譜が七～八〇年（数世代）続いた。しかしその倭国が乱れたので女性である卑弥呼を共立した、という経緯なのである。

「倭国（大）乱」は「わこく（たい）らん」ではなく「わこく（おおいに）みだれる」と読むべき理由がここにある。倭国王帥升以来、イト国男王を盟主として七～八十年続いたという記事が示す西暦180年過ぎにチャンネルを合わせる。

そこに見えたのは、混迷し存続の危機に直面する「イト倭国」体制のすがただった。イト国の確固たる後ろ盾であった後漢王朝の衰微と混乱は、イト倭国内に不協和音をもたらしていた。イト国とタッグを組んで支えてきた盟友ナ国さえも倭国の新生と拡大を模索し始めている。イト倭国以外のクニ・国の動向をもいち早く察知していたからだ。フ（ウ）ミ国やツシマ国、イキ国も東のクニ・国との関係を模索し始めた。イト国王一強の古い倭国体制がいま根本的な見直しを迫られ始めている。

数年後、こうした状況を見透かすようにキビ国の王のなかの王は巨大王墓「榑築」を完成させた。それは巨大な円丘の双方に矩形の突出を付設させるという前代未聞の形状だ。イズモやタニハ、コシでも次々と独自の王族の墓が築造させていった。

アピールは十分だった。権力と権威の“見せつけ”は、イト倭国を構成するクニ・国の緊張感や改革への志向を大いに刺激した。しかしこのアピール合戦は部族的国家同士の牽制を一層顕にする結果ともなった。イト倭国への強力な対抗措置としての新たな軍事同盟というかたちでは実現しなかったのである。

もし、イト倭国以外のクニ・国がイト倭国に対抗するために強力な軍事同盟を果たしていたなら、歴史は大きく逆転していたかもしれない。また、イト倭国の権威がまったく失墜していなかったなら、イト倭国は東へ東へと列島を大きく飲み込んでいったに違いない。

しかし、歴史はどちらをも選択しなかった。そうした同盟を主導するにはキビもイズモもそしてタニハも十分なノウハウを培う経験も時間もなかった。のちの畿内のクニ・国やさらに東のクニ・国はそうした権力

の集中すら果たせていなかった。

2世紀末、本来の部族的国家の「我々意識」が鎌首をもたげてきた。韓や漢帝国に対峙するために築きあげたイト倭国体制は何百年という時間をかけてこの「我々意識」を乗り越えるノウハウを会得してきたのだから。「倭国乱」という八方塞がりの政治状況は、後漢王朝との正式な外交窓口を閉ざしたまま（歴代主の無いまま）、緊迫感と閉塞感が列島を覆い尽くしたのである。



情けないことに私の古いタイムマシンには10年のスケールしか刻まれていない。190年と200年のちょうど真ん中あたりに針を合わせるだろうか。イト倭国にとって重大な会同が設けられていた。その席上、重鎮のナ国王がいきなり動議を発した。「次期倭国王へのイト国王推戴は見直さねばならぬ」。おもだったいくつかの王もこれに同調する。

「何を言うか。いま、イト国王のもとで強力に結集せねば倭国は崩壊する。東の奴らが虎視眈々と狙っているのがわからぬか」。保守派が激昂する。しかしもはや反対を切り捨てて男王擁立を強行する力はイト国にはなかった。とはいえ、それによって替わるだけの力も反対派には無かったのである。

そうか。前回見た最後のイト倭国王となったイト国女王の首長霊継承の秘儀のすがたの背景とはそういうことだったのか。イト倭国の王は続けてイト国から輩出することが渋々認められた。だがしかし、今回は男王であってはならぬ。この時の盟約はイト倭国存続のための保守派と急進派のせめてもの妥協点であった。いずれの国王が立とうと、男性がイト倭国王たることは権力一極化の継承という点から極度に避けられたのだった。

イト倭国の女王擁立の情報はすぐに東へと駆け抜けた。そして王たちはこう呟いた。「(イト倭国は) もはや一枚岩ではなさそうだ」「わしらの出る幕も出てきたということだ」「女王とはどのような人物なのか。それにその秘儀とやらは何だ。わしとて倭国王の権威と霊力とやらを受け継げるのか。すぐに探りを入れてわが国でもその秘儀とやらを検討せい」。



190年の洛陽焼亡は倭にとっても極めて重大な事件を巻き起こした。列島をめぐる海東の政情は一層目まぐるしい展開を見せ始めたのである。遼東太守公孫度こうそんたくが高句麗と烏丸を討って独立意志を表明し、遼東王を

名乗ったのだ。董卓討伐の功勞で司空となった魏の曹操も、呉と蜀との戦いに手を取られていた。「海北のことは一任」する旨の文書が度に託される。

こうして、かつての後漢王朝への門戸、楽浪をも手中に収めた度は、韓と倭を強く認識することになる。ここに公孫という新たな矢が「倭国乱」真っ直中の倭に向けて放たれることになった。

西暦200年頃の公孫と倭の外交事情は記録には残らないけれど、イト倭国内にも東のクニ・国にも後漢王朝に変わる新たな外交や交易の窓口を模索する動きが無いはずはない。2世紀末頃から活発化する各地の積極的な鉄の確保はそれを物語っている。

だが、切実な状況は公孫氏側にもあった。公孫にとって西と南に接する魏、その南に位置する呉は圧倒的な強大国であった。とりあえず魏から棲み分けのお墨付きをもらっていたものの、本音はわからない。呉への警戒と配慮は一層欠かせない。

『魏志倭人伝』には、倭の道里を計ると「当在会稽東冶東（会稽郡東冶県の東に当たる）」という地理観が見て取れる。韓や倭は魏や呉の背後にあると認識されていた。韓と倭を取り込むことはまさに「遠交近攻策」を地でいくものだ。来るべき魏、呉との決戦のためには韓と倭は早急に手を結ばねばならない「遠交」勢力であった。公孫氏からの打診や圧力はイト倭国に限らず、イヅモやキビなどの大国にもおよんだ。

建安9（204）年、度が亡くなり子の康が立つ。『魏志韓伝』はこの時の状況を次のように伝える。「桓帝靈帝の末に濊が強勢し、楽浪郡からの流民が増えてしまった。太守となった公孫康は楽浪郡の屯有県の南に帯方郡を設置し、公孫模と張廠を派遣して濊を討ち、逃亡離散した遺民を収集した。この後、倭と韓は帯方に属した」と。

あれこれタイムマシンを駆使していると、なぜか西暦204年直後のこの事件に明治維新前夜のこの国のすがたが見え隠れする。幕府権力が失墜し、幕臣からの改革だけでなく雄藩のなかからも倒幕や新しい枠組みの実現が求められる。そこに向けて、欧米列強の開国に向けた新たな政権樹立への思惑や圧力が矢のように降り注ぐ。

3世紀という時代に突入したばかりのこの国は、そうした混沌と閉塞の渦中にあつたにもかかわらず、新生のエネルギーが満ち溢れていた。

（つづく）

発掘調査をおこなう時、周辺の調査状況というのは重要な情報となります。それは遺構面までの深さや土層の状況、どんな遺構・遺物が出土するのか予想しておくためです。とはいえ、予想どおりにならないのが発掘調査です。

纏向遺跡第191次調査は、太田微高地という遺跡内でも遺構の多いエリアでおこなわれました。いざ発掘をはじめてみると予想より遥かに少ない遺構量。現場をのぞきにきた先輩職員も調査区を見て、「全然遺構ないなあ」と一言。もちろん全くないわけではありませんが、予想の外れた調査となったのです。

ところがその1年後、里道を挟んだ東側で第195次調査をおこないました。「前回みたいなことはあるまい」そう思いながら挑んだ調査では、予想を遥かに超える質・量の遺構・遺物が出土したのです。

隣り合う畑・田んぼでも、畔一つ挟むだけで全く様子が変わってしまう。どんなに予想を立てても掘ってみるまで分からない。これもまた発掘調査の楽しくもあり、難しいところではないでしょうか。(飯塚健太)



▲纏向遺跡第191次調査（上が西）



▲纏向遺跡第195次調査（上が東）

センター設立10周年を迎えて

2022年の当センター設立10周年記念にあわせて、夏には総計85編を収めた記念論集『纏向学の最前線』を刊行し、この秋にはこれまでの纏向学セミナーの内容を書籍化します。これに先駆けて、21年にはガバメントクラウドファンディングを実施し、94名の皆様より寄附いただきました。改めて感謝を申し上げます。

纏向遺跡や桜井市の文化財、そして当センターの活動にご理解ご協力をいただき、支えてくださる皆様がいれば歩んできました。今後も様々な活動を通して「纏向学」を発展できればと思います。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

展示収蔵室からのお知らせ

from桜井市立埋蔵文化財センター

桜井市立埋蔵文化財センターでは、令和4年10月2日（日）まで、『令和4年度速報展 50cm下の桜井28』を開催しています。詳しくは桜井市立埋蔵文化財センターHPをご覧ください。

▶<https://www.sakurai-maibun.nara.jp>

開館 9:00～16:30（入館は16:00まで）
休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日
入館料 一般300円／小・中学生150円
（20名以上の団体は一般200円／小・中学生100円
市内の小・中学生は無料）
所在地 奈良県桜井市芝58-2
問合せ 公益財団法人桜井市文化財協会
（桜井市立埋蔵文化財センター指定管理者）
TEL 0744-42-6005

編集後記

夏の青空が眩しいなか、無事通信16号をお届けできました！

今回は、いまだ謎の多い上ツ道に関連する調査を中心に、小さな現場にも大切な発見があることを知っていただけたらと思い製作しました。暗いニュースを吹き飛ばすような、楽しい発見を今後も期待しましょう！

担当：立石千紘

纏向考古学通信Vol.16

発行・編集 桜井市纏向学研究センター
発行年月日 令和4(2022)年8月19日
所在地 〒633-0001 奈良県桜井市三輪686
芝運動公園内
TEL/FAX 0744-45-0590

*纏向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成し、ご寄附いただいた方に配付しています。